

concert

イゴール・レヴィット監修
ルツェルン音楽祭
ピアノ・フェスティバル

2019年までの22年間、ルツェルン音楽祭が開催していた「ピアノ・フェスティバル」が、イゴール・レヴィット（D）の監修で生まれ変わり、5月18日アレクセイ・ヴォロディン（D）との共演で開幕した。レヴィットがシュエーベルト「アレグレット」D915を無重力な音で歌うように弾くと、ヴォロディンはシューマン《アラベスク》で応える。モーツァルト「2台のピアノのためのソナタ」では兄弟が戯れるように、楽しそうな挑戦

を重ねる。ドビュッシー「白と黒」では、大きな水彩画を描くかのような二人は、最後のラフマニノフ「2台のピアノのための組曲第一番《幻想的絵画》」で頂点に達した。美しい音の噴水のような《舟唄》、ロマンティックな《夜と愛と》、《涙》ではロシア人らしい内面的なラフマニノフを聴かせ、《復活祭》ではすべてを出しきってすごい迫力で駆け抜けた。

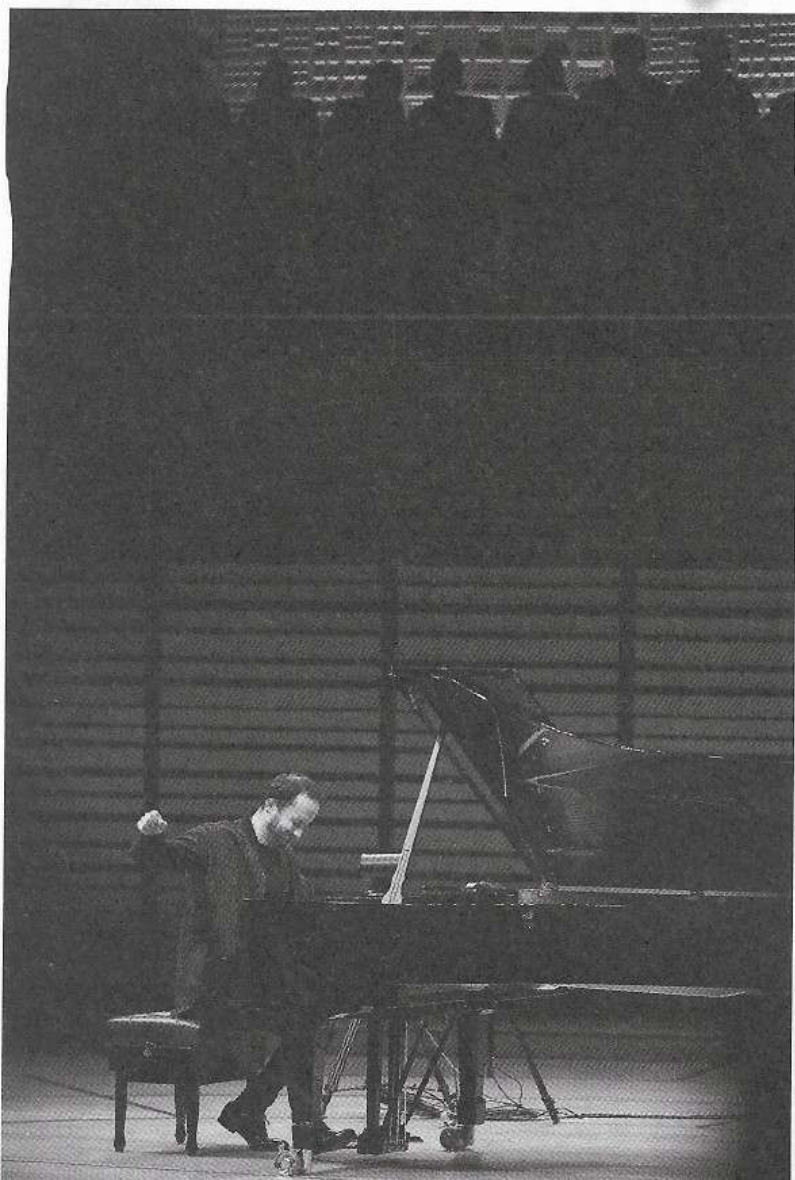
19日はレヴィットのソロを聴いた。ブラームス（レーガー編）《4つの厳粛な歌》は、まるでピアノで歌う歌曲だ。墓の底から歌声が響いてくるようなリアル感と、「死」というドイツ語を発したような表現力に圧倒された。続いて、レヴィットが「最も優秀なピアニスト」と呼ぶフレッド・ハーシュにルツェルン音楽祭が委嘱した「無言歌曲集第2」が世界初演された。マラー（ステイーヴンソン編）「交響曲第10番」から《アダージェット》は期待外れだったが、プロコフィエフ「ピアノ・ソナタ第7番《戦争ソナタ》」演奏後はものすごい拍手に包まれた。

その後はフレッド・ハーシュ・トリオがルツェルン・カルチャー・コングレスセンター（KKL）をジャズクラブに変えた。ハーシュのピアノは、聴き手を引き込み、寄り添ってものがたる。

20日にはレヴィットの映画「No Fear」が自身の語りとともに初公開、21日アンナ・ヴィニツカヤ（D）のリサイタルでは、冒頭のフランク「前奏曲、フーガと変奏曲」から美しさに鳥肌が立った。続くスクリヤーピンも圧巻で、「ワルツ」へ短調、「幻想曲」（《2つの詩曲》、「ピアノ・ソナタ第5番」と、凄い迫力に振り回された。シヨパン「即興曲」全4曲は、シヨパン自身が即興で作りながら弾いているような自然さ、最後のラヴェル《高雅にして感傷的なワルツ》、そして《ラ・ヴァルス》の大きなスケール感は抜群だった。

エンディングは、ハーシュとレヴィットにジャズ・ピアニストのヨハンナ・サマーとメルト・ヤルニツが加わり、名曲クラシックを元に即興で答える歌詠みのようなコンサートで来年に繋いだ。

■中東生



本音楽祭の監修を務めるイゴール・レヴィット（D）。迫力ある演奏を披露 ©PeterFischli / LucerneFestival



イゴール・レヴィットとフレッド・ハーシュの連弾は圧巻 ©PeterFischli / LucerneFestival

●Concert Data

ルツェルン音楽祭「ピアノ・フェスティバル」
〈日程・会場〉5月18～21日・ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター（スイス）
〈出演〉イゴール・レヴィット（D）、アレクセイ・ヴォロディン（D）、他